

## 手話を多くの人に知ってもらいたい

一般社団法人福島県聴覚障害者協会の事務局長であり、郡山市聴力障害者協会の理事長を務める小林靖さん。

ろうあ運動に40年以上取り組むほか、郡山市を中心に学校や行政向けの手話講座で講師を務めています。

また、手話の普及活動にとどまらず、きこえない・きこえにくい子どもたちの親御さんのサポートなど、幅広く活躍されています。



小林 靖 （こばやし やすし）

1958年 福島県生まれ

1977年 茨城県立水戸聾学校高等部卒業

1988年～ （一財）全日本ろうあ連盟評議員

2007年～ （一社）福島県聴覚障害者協会事務局長

2016年～ （特非）郡山市聴力障害者協会理事長

—小林事務局長は、福島県でのろうあ運動に40年もの長きにわたり取り組んでこられたと伺いました。その間、さまざまなご苦労や喜びを経験されたことと思います。これまでどのような活動に携わり、どのような経験をされてきたのか、ぜひお聞かせください。

ろうあ運動に携わって40年以上が経ちましたが、本当にあっという間ですね。40年前は、まだ手話への理解も乏しく、偏見もありました。また、ろう者への理解も十分ではなく、手話通訳制度も確立されていませんでした。先輩方も、ろうあ運動の活動に大変苦労されていたことと思います。

そうした様々な苦労話を聞いてきましたが、おかげさまで、福島県では手話言語条例が制定され、ろう者がどのように活動していくべきか、本格的に動き始めたところです。



現在の課題は手話通訳制度です。まず、手話通訳者が少ないことが挙げられます。特に福島県は面積が広いため、浜・中・会津の各地域

で手話通訳者を確保・調整するのが大変です。

私は福島県聴覚障害者協会の手話対策部として、手話通訳制度の充実を図るための活動も行いました。具体的には、新たに出版された手話の本を活用して、最新の情報を学びました。また、手話の語彙が不足している現状を踏まえ、語彙を増やすことについて全日本ろうあ連盟と情報交換を行い、手話を理解しやすくなるような取り組みを進めました。

さらに、ろう者の手話講師を育成することも課題です。地域や指導者ごとに考え方が異なるため、統一的な指導ができるようにまとめることに最も苦勞しています。

40年経っても、まだまだ課題があると感じることもありますが、「障害者差別解消法」や「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」の施行により、これまでろう者が認められてこなかったことが、少しずつ認められるようになってきました。これからは、若い世代が活躍できるよう、道を切り開いていきたいです。



—小林事務局長は福島県聴覚障害者協会だけでなく、郡山市聴力障害者協会でも活動されていますが、郡山市聴力障害者協会での主な活動について教えていただけますか。

郡山市聴力障害者協会は、全日本ろうあ連盟の下部組織であり、福島県聴覚障害者協会の関係団体です。主に、福島県聴覚障害者協会とのパイプ役を担っています。地元での活動に必要な情報を全国組織とつながりのある福島県聴覚障害者協会から入手しています。



郡山地方広域消防組合の手話講習会で講師を務める小林事務局長

—郡山市は、県内で最初に手話言語条例を制定し、手話に対する取り組みが盛んな自治体だと感じています。小林事務局長は、郡山市消防本部の手話研修で講師を務めるほか、郡山市のユニバーサルデザイン啓発動画や郡山市消防本部の動画にも出演されていますが、郡山市とはどのような形で連携を進めていらっしゃるのでしょうか。

郡山市は、手話言語条例が制定されて10年目になります。市民の

方々は、手話を広げるため一生懸命活動しています。

郡山地方広域消防組合では、「いのちを助ける仕事なので、手話を覚えるのが当たり前」という考えのもと、手話講習会の講師を務めました。また、郡山市内の小学校・中学校・高校・専門学校・大学からの依頼を受けて、手話の出前講座も行っています。

この取組が10年後の社会を変える一歩となり、共生社会の実現につながることを願っています。

夢は、郡山市が「手話のまち」として全国に知れ渡ることです。



郡山地方広域消防組合の手話講習会で傷病者役を務める小林事務局長

—きこえない・きこえにくい人にとってのオリンピック、デフリンピックが、ついに今年の11月に開催されます。そのうち福島県ではサッカー競技が行われますが、率直な想いをお聞かせください。

デフリンピックの日本招致が決定し、東京での開催にも驚きましたが、Jヴィレッジでサッカー競技が開催されると知ったときは、それ以上に驚きました。

デフリンピックは認知度がまだまだ低いため、開催をきっかけに手話に親んでもらい、手話の応援で大会を盛り上げていけたらと思っています。福島県聴覚障害者協会が県と連携し、「手話に親しむ出前講座」を実施していることをとても嬉しく思います。

今後も県と協力しながら手話の普及に努め、きこえない・きこえにくい子どもたちが夢を持てる社会になることを願っています。

—デフリンピックの開催をきっかけに、デフスポーツやろう者文化への関心が深まっていると感じておりますが、きこえない・きこえにくい子どもたちの生活や教育環境がどのように変化し、彼らの将来にどのような可能性が広がると考えていますか。

きこえない・きこえにくい子どもたちの親御さんもサポートしたいと考えています。親御さんは子どもとのコミュニケーションをどう取ったらいいのか分からないという悩みが多く、その対策が必要と感じています。

以前、きこえない子どもの親御さんから、子どもとどう接していいか分からないと相談を受けたことがありました。そのとき、手話を覚えてほしい、手話で会話してほしいと伝えました。しばらくしてから、その親御さんと再会したとき、すごくうれしそうな顔で寄ってきて「子どもと手話でケンカをしました。手話でコミュニケーションが取れました。気持ちが通じてうれしかったです。」と言われました。

これからも、きこえない・きこえにくい子どもたちや親御さんの気持ちを考えながら、サポートして行きたいと思います。



## —小林事務局長も何かスポーツをされますか？

今はスポーツをしていませんが、以前は野球をやっていました。

野球を始めたのは高校に入学してからです。茨城県立水戸聾学校で、高2のときに関東ブロックで優勝しました。ただ、その後、足をけがしてしまい、走るのが難しくなり野球を辞めました。

卒業後は会津に戻り、足の調子も良くなってきたので、野球を再開しました。福島県聴覚障害者協会の野球部では、キャッチャー兼監督を務めていました。

東北大会で勝つことができて、全国大会では毎回1回戦で負けていました。野球部員一同何としても勝ちたいと、様々な活動も行いながらも練習に励み、ついに、1990年の全国ろうあ者体育大会で第3位、銅メダルに輝くことができました。



1990年の全国ろうあ者体育大会で第3位に輝いたときの福島県聴覚障害者協会の広報誌「ろうあ運動ニュース」

—茨城県の聾学校に通われていたんですか？

そうなんです。当時は福島県立聾学校の高等部に普通科が無かったため、近隣の県で普通科のある聾学校を探しました。寄宿舎もあったので、茨城県立水戸聾学校高等部に入学しました。

入学して感動したのは、生徒数も多く、多くの方々と手話で会話ができたことです。また、寄宿舎生活の3年間も手話を通して会話をしたことが青春でした。

—リフレッシュ方法や趣味を教えてください。

海釣りや港巡りが好きです。以前は、暇さえあれば海へ出かけていました。

—海釣りや港巡りとは、海が大好きなんですね。これまで釣った一番の大物はどんな魚ですか？また、好きな港はどこですか？

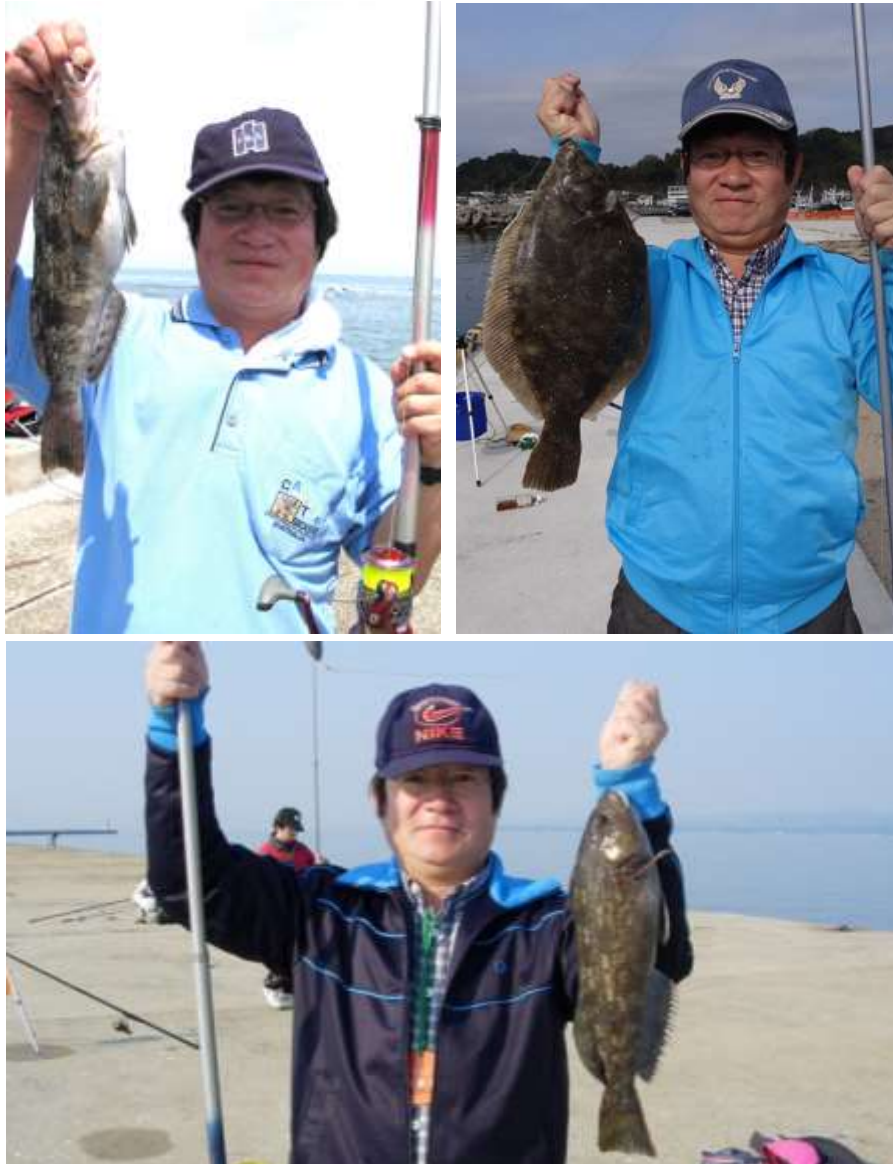
一番の大物は、カレイとアイナメです。

港は、宮城県から千葉県の銚子港まで巡りました。

釣りも楽しいのですが、港で地元の人と触れ合うのも大好きです。

一番好きな港は請戸漁港です。震災前、地元の方々と身振り手振りで触れ合う時間がとても楽しかったです。何度も訪れていたのに顔なじみの方も多く、いつも温かく迎えてくれました。原発事故から3年経ったとき、請戸漁港を訪れましたが、そのときの状況から復興は難しいのではないかと思ってしまいました。だからこそ、請戸漁港が再開したときは本当にうれしかったです。





小林事務局長が釣り上げた大物🐟

—デフリンピックを通じて、きこえない・きこえにくい人にとって、どのような社会になることを望んでいますか。

小中高校生や大学生に、きこえない・きこえにくい人がいることを理解してもらい、手話などを使った情報伝達の大切さを知ってもらいたいです。多くの人に手話を知ってもらい、将来的には、きこえない・きこえにくい人ときこえる人が自然に交流できる場をつくれたらと思っています。